
教室戦争

鎖蛤蝮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

教室戦争

【Nコード】

N2938Z

【作者名】

鎖蛞蝓

【あらすじ】

日本は平和主義の方針で進めていたが、戦争を放棄した代わりに国内の防衛力も落ちていった。

高校までの体育の教科での基礎体力が不十分だということとある公立高校にて試験的に導入した「基礎体力強化時間」。

女子の希望者と男子とがバトルロワイヤル形式で互いに争うということが行われていた。

前置

俺はその日、「戦場」のど真ん中に立っていた。

|| 教室戦争 ? ||

「やっと着いたか…ねむ…」

札幌から新幹線で何時間かかっただろうか。

多少の疲労感と共にこのでかい車体が泊まるのを感じた俺は自分の上半身と同等の大きさぐらいの荷物を抱え、東京の地に足をつけた。

やはり札幌の駅よりでかい。気がする。

いやでかいな。まだホームしか見えてないからなんとでも言えんが。

「やっぱり飛行機にしときゃよかつたかな…」

小さい頃（4歳くらいだったか。妹がまだ2歳くらいだったとき）に親との家族旅行で初めて飛行機に乗り、あまりの耳の痛さに12年経った今でもトラウマものだったので、今回の父さんの転勤による札幌→東京間の移動も家族の中で俺だけは新幹線をセレクトした訳だが。

…いや、もう着いたし過ぎたことは気にしないのが一番だって誰か言ってたな。うん。

「えつと次は…」

とりあえず通過点である東京に着いたはいいが父さんの転勤先は神奈川。

5歳以降北海道から出たことがなかった俺なので、

「…川崎行きの切符はどれを買えば」

初歩の段階でつまずいていた。

いや待て落ち着け俺大丈夫だ道産子といえども札幌生まれ札幌育ちだ何年間札幌に住んでいたと思っっている路線図くらいそれなりに詳しい筈。はず。

それに考えてもみるよ見た目的にも年齢的にもでかい荷物を持っていることも全てふまえて周りの何も事情を知らない一般ピーポーからしたら俺は状況したての高校生つばいじゃないか。そんな見た目の奴が「すいませーんどの切符買えばいいんですかー」なんて聞くのはあまりにも恥ずかしくすぎるいやお前等がどう考えていようと少なくとも俺は 恥 ず かし い。 どうしたものが。

俺は駅の中にあるファミマにてジャンプを立ち読み（するふりを）しながら一人脳内戦争をおこしていた。するとその時。

「あれ？らぎじゃない？」

俺の後方左側から突然聞き慣れない声で名前を呼ばれた。気がした。

しかし俺は「らぎ」なんという痛々しいあだ名を持った覚えはないのだがと考えたところでそういえば数年前そう呼んでいた奴が約一名いたなと考え

とりあえず後ろを振り向いてみる

「……………どなたですか」

知らない人だった。
正確に言えば見覚えのない人だった。

「？君、霧ヶ崎くんじゃないの？霧ヶ崎柊君でしょ？」

確かに親から授かった一生付き合っただけならならぬ相手一
号はそれで合っているが話しかかみ合っていない

「だから俺はあんたが誰だって聞いて「やっぱりぎじやんなんだ」

人の話を遮るな

「あたしの事忘れちゃった？咲晴だって、五月咲晴。」

……………さつきさくは……………？

「……！……もしかしてさくはか……？小六の時転校した、……五月……？」
「だからそう言ってんじやん。まじで忘れられてたか」

いや、忘れてたわけでは……

五月咲晴。

札幌南区のマンションに住んでいた霧ヶ崎家の隣に引っ越してきた家族の一人娘で所謂俺の幼馴染みに該当する人物である。

2歳下の俺の妹とも仲が良く、放課後や休日は俺、妹、咲晴の三人で遊ぶことが多かったように思う。

当時の咲晴の髪型といえば、肩にかかるかかからないかくらいのベリーショートで、顔つきも性格も俺より男らしかったという記憶が残っている。

But現在。

「お前……髪の毛びたな……」

咲晴の髪は腰までのびており、側頭部で直径約10センチ程のリップンで結ってあった。

おいおいイメチェン成功しすぎだろ。渋谷でもあるいていれば20歩ごとくらいにどっかのモデル事務所にスカウトされてるんじゃないかこいつ。

「そう?…ああ、もう君と会わなくなってから五年も経ってるんだから、そりゃ髪ものびたくなるって」

「髪が意志を持ったのかというつつこみはおいといて、何故お前は

「ここにいる？今日は日曜だし通学してわけでもないだろう？」

服装からしてこのカジュアルな服が制服でないかぎりこれから学校ということはないだろう。

「え、だって昨日東京来るって言ってたじゃん。お迎えよお迎え」

なんと。

知らぬ間に俺はこの幼馴染みに東京行きの事実を告げていたらしい。

「…ちょっと待て。五年間声すら聞いていないような奴にどうやって言えると…」

「だから、昨日チャットで言ってたでしょって」

「チャットだと？」

札幌で通っていた高校に小学校からの知り合いはいない。つまり奴にこのことを告げられる奴はいない。

こいつと文通でもしていたかと思っただがそんな心当たりもない。妹にもそんなそぶりは見られなかった。

そうなるとチャットしかあり得ないことは確かなのだが、最近顔をだしているチャット相手に女はいなかったように思える。

「でしようね。あたし男のふりしてたし」

「なんの為に…」

「男のほづが色々と便利なのよ。変な奴に絡まれることもないし」

「HNは？」

「紅竜」

あの厨二臭かった人が。お前だったんだな。

ていうかあの名前こうりょうって読むのか。中国人みたいな名前ですね。

「細かいことはいいじゃん。なんだっけ、高校あたしと同じところよね？家も川崎？」

「あ、おう」

「切符は？もう買った？」

まだで悪かったな

「怒るなって。じゃああその券売機で買ってきなよ。どうせいらぬい羞恥心で人にも聞けなかつたんでしょ？」

うるせえ

という課程を経て現在自宅周辺。

「ん？」

「あ？」

目の前にはただの一戸建て。

その左隣には立派な一戸建て。

そして咲晴はただの一戸建ての左隣を指さして

「あたしんちここなんだ。また隣じゃん」

笑いながら上京したての高校生みたいな奴に向かってそう言った。
ていうか俺に言った。

何故だ数年前は同じマンションに住んでいただろ格差社会か。

「お母さんがデザイナーやってるのは知ってるよね？…二年くらい前にちよつと成功したらしくてさ。まああたしには関係ないんだけど」

関係大ありだろ。資本主義社会に感謝しろちくしょうめ。

東京で一戸建てを買えたってだけで俺の家だっけかかなりの金持ちだと思っただが甘かった。上には上がいるもんなんだと思いついた17の春である。

「…うん、とりあえずその荷物置いて、今日はもう引っ越しの片付けに徹したら？明日から学校は来れるんだよね？」

「ああ。というか、父さんから行けとの指令がでているんだ」

「…そっか」

そう言っつて自らの衣食住の場を見つめながら、晴れ渡る空の下の桜の様な顔で笑った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2938z/>

教室戦争

2011年12月10日13時45分発行